

穴粟で暮らし始めて

思いがけない出張で忙殺されている間に夏が過ぎてしまった。久しぶりに畑に足を運ぶと、案の定、雑草ばかりが旺盛に伸び盛っている。トマトやナス、ピーマン、オクラ、ネギなど期待を込めて植えた夏野菜が雑草の陰に隠れ、どこにあるのかも分からない。

「用がなくても、日に1度は畑を見に行ってください」。一昨年の夏、畑仕事を手伝ってくれた農学専攻の学生にくぎを刺された言葉が頭をよぎる。

今年は猛暑で天候も不順だったにもかかわらず、近隣住民の裏庭では色とりどりの野菜が元気に実っている。きれいに手入れの行き届いた畑を見ると、野放しの「遊牧民農園」が恥ずか

「畑では1年生」忘れずに

遊牧民農園①

しく、野菜作りを手ほどきしてくれたお隣さんに申し訳ない気



雑草が伸びた遊牧民農園。冬野菜を植えるには時間がかかりそうだ。穴粟市山崎町宇野

持ちだ。

昨年は、たくさん夏野菜が収穫できたので正直なところ気を抜いてしまった。今更ながら大いに反省だ。気温や降水量、動物や虫の動きなど、野菜作りに影響するさまざまな条件は毎年少しずつ違う。一度うまくいったからといって、あぐらをかいてはいけない。

「畑では、いつも1年生」の心構えが大切だと聞いたことがあるが、その通りなのだろう。この夏の失敗から、①当たり前だが手間をかけないと野菜も応えてくれない②地域住民の優しさとありがたさ。この2点をあらためて学んだ。

今度は冬野菜の収穫を目指したい。地域住民に教えを乞う日々はまだ続く。

(大阪大招聘・客員教授 思沁夫)

掲載年月日：2022年9月15日

掲載面・ページ：朝刊・西播 20

見出し：「畑では1年生」忘れずに